

# 比翼ひよくの束たばね 第六十七回

## 時節に寄せて

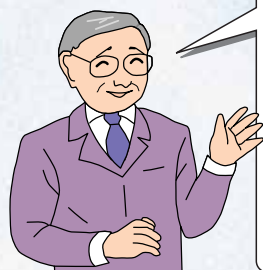
すっかり陽ざしが明るくなって、春の訪れが感じられる。

二月三日は節分、そして四日が立春である。寒いとは言え、確実に季節は動き始めている。

少年時代の思い出がある。節分には、父親が鰯いわしの頭につばをかけて焼き、豆のからに刺して家の入口にさした。疫病神が入らぬようにするためだと教えられた。

また、大豆を煎いって一升枥しやうりに入れ、神

私市長の思いや願いなどを市民の皆さんにお伝えします。



棚たなに供えた。その豆を「福は内、鬼は外」と大声をはりあげ豆まきを行った。恥かしくて声が小さいと、もっと大きな声でと父親からうながされた。終わってから、家族がそれぞれの年の数の豆を食べた。

二月四日は旧暦で新年になる。元日と立春が同時にやってきて、旧正月を祝ったものである。

わが家でも旧正月が過ぎると田畑の仕事が本格的に始まり、旧正月は農事と深い関係があった。

二月最初の午の日は初午である。この日に母は、塩引きの頭と大根、人参を鬼オロシおろしでおろし、年越豆や酒粕しゅぱくなどを入れてぐつぐつ煮て、シモツカレしみつ（シミツカレ）を作った。

子どもは好きなはなれなかった、このシモツカレと赤飯をわらつとに入れ、屋敷の中のお稲荷さんや柿の木につるし、豊作を祈った。

またその日には、さいの目に切った豆

腐と輪切にしたネギと赤いトウガラシを柵の枝に刺し、入口や庭先に草刈籠を伏してその上にさした。

また、めかいめかい（かご）を竿の先に高くかけた。母から、魔除けのためだと教えられた。

時代は大きく変化し、年中行事も、民間信仰も次第に消え失せていく。

寂しいかぎりである。私どもが育った頃、決して恵まれていたわけではなく、貧しかった。しかし、父も母も日々の生活の中でさまざまなきたりを教えてくれたし、今思うと心は豊かであったような気がする。

戦後68年を経過し、社会は大きく変わった。今日、成熟社会にあつて矢板市も人口減少時代に突入し、超高齢化社会を迎えている。2025年（平成37年）には、昭和22、23年の戦後生まれの団塊世代が75歳の後期高齢者になる。したがって福祉、介護、医療対策は喫緊

の課題となってくる。

また、リーマンショック以来の長引く景気の低迷により地域経済は衰退し、行政も企業も事業所もおしなべて厳しい経営を強いられている。加えて、放射性指定廃棄物の最終処分場候補地の問題など市民の閉塞感が増大するばかりである。

このままでは矢板市の前途は開けない。

中国春秋戦国時代の思想家荀子の言に、「水はすなわち船を浮かべ、水はすなわち船を覆す」という故事がある。

水を市民に例えれば、船は指導者にあたるかも知れない。指導者一人では何もしない。市民の理解、協力、支えがなければ事は成し得ない。

誤った選択が市の将来を大きく左右してしまう現実がある。

日々、自らの在り方を問い続け、信頼が得られる努力をしなければならぬ。

※タイトルの「比翼の束」とは、市民と行政を翼に例え、ふたつを束ねてまい進するさまをイメージしています。